



登場人物紹介

ホワンホワンホワンホワンホワーーーーン♪



「僕はクロマオー。前はマゾクの王子だったけど、今はヒトの奴隷の身分だよ。10年もそんな生活してます。よろしく！」



「そしてこの人はネイちゃんです。僕が働かされている工場の娘で、僕を気にかけてくれるんだ。明るいのに時々悲しげで、僕も悲しくなる。もっとニコニコさせてあげたいな。」



「この人はシロバンチョー。僕らを助けてくれたんだ。ネイちゃんはこの人とあんまり話したくないみたいだけど、何でだろう？笑うと目が糸になっちゃう可愛い奴だよ。」

デフォルトコマネチ（通称デフォ） 「野球ボールのような体に手足がコマネチ型の、鳥タイプマゾクだよ。昔マゾクの王家に勤めていて、僕を今でも『さま』付けて呼ぶ律義な人だ。同じ工場にいたんだけど、殺されたって聞きました。そんな……！」

フォー「……。マゾクの王様だった僕の父だよ。10年前のヒトとマゾクとの戦いから、行方は杳として知れませんが、僕が知らないだけなのかもしれない。死んだことを……。」

「むにゃむにゃ……変な夢だな。自己紹介する夢なんて。」

※なお、人と表記した場合はマゾクでもヒトでも変わりなく数や本人の状態を表しています。一人を、一マゾクとは書きません。では、引き続きお楽しみいただけたら幸いです。 (イップウ)

うつくしいマゾク

クロマオーが目覚めると、すっきりとした快晴だった。ネイと出かけ、シロバンチョーと会った時から、雨は降っていない。

庭の水撒きを仰せつかることも近頃多く、クロマオーは密かに喜んだ。

水撒きをしているとネイが遊びに来るのだ。

基本的に工場にいる時はネイは来ないので、クロマオーは雨“来ないで”乞いをするのに余念が無かった。

クロマオーが勝手に編み出した方法だが、まず両手を水平にあげ、屈伸する。雨が降るを表しているポーズだ。

そして次に2回、両手でばってんをつくって空に向けてアピールする。神様がいるとしてのことだ。

この雨“来ないで”乞いは結構効くらしい。しかし一緒に働く仲間からは呆れた目で見られている。ネイと仲良く見えることも呆れられている原因だ。変に買い被る人もいる。

『マゾクを復活させるためにネイを騙し利用する。』出来れば大したものだが……。

実際はネイにたじたじだった、クロマオーは。

クロマオーがその日、朝食のお皿を洗っていると、敷地内に入ってくる馬車が見えた。

随分と派手な馬車で緑で大きく「ラタームズマジックプラン」と書いてある。何事だと、仲間のマゾク達が表に出てきた。

わいわいと騒ぐマゾク達。

表の水道は冷たく、黙々と洗うクロマオーの服に跳ねた。クロマオーはこういう時、デフォに会いたくなる。

ラタームズマジックプランをクロマオーは知っていた。

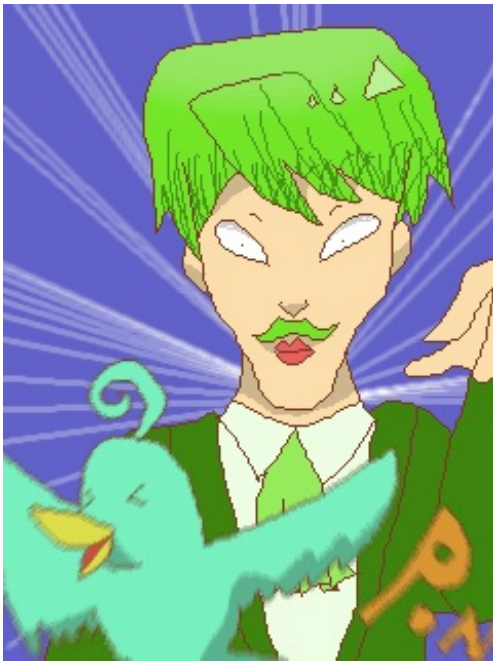
先日ネイと出かけた街で、掲示してあるポスターで見たから。

うつくしいマゾクは見世物にされるのだと知った。

それからすぐクロマオーは工場長に呼び出されて、マジシャンのラタームが持ってきた荷物を運べと申しつけられた。

ネイも騒ぎを聞きつけやってきた。クロマオーに小さく手を振り、ラタームの方に行った。

心なしか顔が赤い。まさか……とクロマオーの気持ちは嫉妬に染まる。



ラタームは今夜ここでマジックショーを開くらしい。

片づけさせられた工場の真ん中で、鳥を出してみせた。クロマオーの目の前でだ。

ラターム「こんにちは。君はなんて言うのかな？」

くぐもった小さな声で、バサバサと鳥が飛ぶのにかき消されそう。マジシャンって人前でマジックをするヒトのことだよな、と自分の知識を改めて反芻してしまう。

目が控えめに問い返してきたので、クロマオーは慌てて名前を告げた。

ラターム「そうか。クロマオーくんか。君が僕の荷物を運んでくれたんだね。疲れたろう。良かったら、このクッキーをお食べ。ショーの手伝いもしてもらえるかい？」

どこから出したのか、クッキーがその手に握られている。受け取りながら、なんて怪しいヒトだろうとクロマオーは思った。何だかイライラする。

クロマオー「今夜のショーは何人来るのでしょうか？」

ラターム「そうだね。取引先が呼ばれて来るようだ。300人って所じゃないかな。」

クロマオー「でしたら、僕は配膳に回されるかもしれません。僕が仕事を決められる訳ではないので……。」

ラターム「そうか。もし君が奇術に興味があるようなら、僕から話をしておくが。」

クロマオー「……そうですね。」

はて、どちらが楽か。

仮に辛くても、したことのない仕事をしてみたい。

それにネイに近づかないようにラタームを監視せねばならない。

クロマオー「ではお願いします。」

ラターム「分かった。君、よろしくな。」

ラタームはほほ笑んだ。怪しいが、良い人にも見える。こういう人は女性を悩ますのだろうと思う。

ラターム「僕は君が気に入ったのさ。君はあの工場の娘が、好きなんだろう？」

クロマオー「何を言うのです？」

動揺を悟られないように不自然な無表情をつくると、ふっと笑われた。

ラターム「僕も同じだった。ベルのことが好きで、彼女に近づくマゾクが許せなかった。僕がヒトで、彼女がマゾクだった。それはそれは、うつくしいマゾクだった。」

難解なヒト

ラタームの声は最後小さくなり、やがて消えた。

近くにいた助手のヒト、ポチギが彼を支えて連れて行ってしまった。

ポチギはラターム以上に声が小さい男性だ。ラタームに何か勇気づけているようだが、一切聞こえない。

あの二人はあれで意思疎通がかなうのだろうか。謎である。

あらかたの荷解きが終わると、昼の休憩時間になった。

前ならばデフォとキャッチボールをしていた時間だが、デフォはいない。

クロマオーはこっそり、いつも水撒きをさせられる工場長の庭に出て、来るかわからないネイを待った。

ラタームは、その子がうつくしいマゾクだったと言った。

うつくしければ、ヒトに愛されることもあるのだろうか。

ちなみにクロマオーは決してうつくしくない。

クロマオーはマゾクがみんなそうであるように、個性派だった。

デフォよりはマシだと思うが、名前も直球だ。うつくしさのかけらもない。

ため息をついて空を見上げた。雲行きが怪しかったので、空に向けてばってんばってんとしたら、急に日がさし晴れ渡ってきた。そういえばずっと雨が降らないと、ニュースになっているらしい。

ちょっとおまじないが効き過ぎているな。

午後からは舞台の準備だった。夜にお客様が来るので、それまでに終えなくてはいけない。

ラタームはタネを惜しげもなく見せたうえ、耐久性を調べるのに躍起だった。危ない目にあうのはマゾクだが、マゾクが死んではマジックは失敗だ。前もって用意された、これまた美人なマゾク達は双子で雁首そろえて心配そうに舞台を見ていた。

ラタームがクロマオーに近づいてきて、オレンジジュースをくれた。汗をかいたので有難い。そのまま誘われ楽屋に入った。

ラターム「クロマオーくん、こんなものを工場のお嬢さんから貰ったよ。」

ラタームが手にしているのは、古典的なラブレターだ。白い封筒に、ハートのシールがついている。

先ほどの休憩時間の際に、ネイはラタームの元に行ったのか。



クロマオー「……！！」

ラターム「どうやら僕のファンのような。結構有名だからね、僕はまた。」

クロマオー「それではファンレターで大変でしょう？僕が処分しておきます！」

ラターム「僕はファンレターを処分なんてしないよ。君はそう言って、中身が見たいんだろう？
憧れの人にこの少女がどんなことを書くのか知りたいんだ？どうかな？」

クロマオーは負けた。その通りだ。

好きな人に対してネイがどうなのか、知りたい。クロマオーに対する時と違うんだろうか……。

クロマオー「何でもします。」

ラターム「ふふふ。」

クロマオー「なんなりとお申し付けください。」

ラターム「ならば、きみは秘密が守れるか？」

頷いたのを合図に、ラタームは話を始めた。

うつくしいマゾク、ベルと初めて会った時の話。

初めて二人で出かけた話。

海でのこと。

雪が降った日のこと。

完全にのろけである。

頭が痛いな、と感じていた頃、話は急に色を無くした。

ラターム「彼女と喧嘩をして、僕は彼女を食べちゃったんだ。それで話は終わりさ。」

椅子の上で、ラタームは膝を抱えた。石になったようだった。

クロマオー「食べちゃったってどういう意味です？エッチな意味？」

ラターム「そういう意味もある。おっぱいも食べちゃったからね。言うことを全くきかなくてイライラしていて、どうにも止まらなかった。動かなくなったから全部食べたよ。僕はそういうヒトなんだ。」

ラタームの膝は濡れていた。泣いているが、到底許せることではなかった。

だがヒトに逆らっていいのか分からない。ここでひどいことを言って、ゴミ捨て場に行きたくはなかった。

クロマオーはだから黙った。

十分ほど、ラタームの小さな泣き声だけが響いた。

ラターム「ありがとう。きみに聞いてほしかったんだ。ヒトを憎まないきみに。」

ラタームはまた労いのオレンジジュースをくれた。

今度は苦い味がした。

ヒトにとって、マゾクは奴隷でしかないのだと実感する、苦味が走る。

オーガスタって誰のこと

「マゾクは脳の構造から、感情的なんだ。僕だってそんなことしたくなかったよ。でも彼女はヒステリックだ。愛していたから、食べたのさ……。」

クロマオーは歯を食いしばり、話を聞き終えた。

貰った紙パックのオレンジジュースは、楽屋を出る時握りしめピュッとクロマオーの手を汚した。

クロマオーはベルを知らない。

脳の構造のことなんて勉強したこともない。

ただ、あらゆる偏見が疎ましい。その自己満足のゴングだ。自分を保つために相手を否定せずにいられないのなら、その関係は愛とは言えない。そして愛が無いなら、暴力は犯罪だ。

ラタームとベルとの間に起きたことは戦争に違いないのだ。

クロマオーは怒りを顔に出すこともなく、奴隷なりに、舞台の準備に戻った。

可哀想なベルに、今夜祈りを捧げよう。

今のクロマオーに出来る精一杯のところで。

夕日が落ちたのは見なかった。



次に空を見た時は、色鮮やかなライトが、パッと光っていた。

急にネオン街のようになった工場は次から次へとお客様が入ってくる。

うつくしいマゾクのお嬢さんたちは、спанコールの衣装に着替えた。青い肌に似合うように、黄色の衣装にしたとキャイキャイ騒ぐので、まるでペンギンだねと言うと顔を引っかけた。

マゾクの美人は性格がキツイのかな、とクロマオーはヘンケンを持つ。言ったら、また怒られた。

。

給仕に駆り出され、会場を見まわした。と同時にラタームが舞台にあがる所だった。

何て張りのある声。すこし秘密めいた唇は繊細に言葉を紡ぐ。

マジシャン・ラタームの舞台が始まった。

クロマオーはとりあえず仕事をしているように見えるように、ワインボトルを持つ。

忙しそうに会場を歩きまわりながら、ネイの姿を探した。

マゾクの美人がダメだと言う訳ではない。

もしかしたら長く一緒にいればマゾクの方が良いのかもしれない。

ヒトが好きな訳じゃない。

ラタームには拒否感がある。許せないと思う。

ずっと、ネイが気になっている。

初めて会った時からずっと。

夢のように混んだヒトの中をクロマオーは歩んだ。

「おまえ……」

目の前に見知った顔があった。シロバンチョーだ。

シロバンチョー「やあ。ここが会場だと聞いて、いるかと思ってた。」

クロマオー「こんにちは。その節はどうも。」

シロバンチョー「父の代わりに来たんだ。といっても、『ワタシでは代わりになりませんが。』」

クロマオー「？」

シロバンチョー「口が痛くなるくらいそう言ってるんだ。気にしないでくれ。」

クロマオー「シロさんは、マジック好きですか？」

シロバンチョー「シロさんか、良いよ。マジックは見たことがない。有名な人らしいな。」

クロマオー「全部タネを知ってます。教えましょう！まず空中浮遊は……。」

シロバンチョー「バカ！余計なこと言うな！」

クロマオー「ダメですか？」

シロバンチョー「個人的に後で聞く。」

クロマオー「知りたいのか知りたくないのか分からない人ですね。ということはネイちゃんにも言ったら怒られるの？」

シロバンチョー「ネイって誰だ？」

クロマオー「えっと、オーガスタさまって言えば分かりますか？」

シロバンチョー「オーガスタか。怒るんじゃないか？お前の言うことなら怒らないかな。」

シロバンチョーはネイのことを知っている。

クロマオーは低い鼻にしわをつくった。

ならば何であんなに馬車でシロバンチョーと話さなかったのか。

不思議だった。

ネイは時々頑なだった。

クロマオーはシロバンチョーと離れ、ふとテーブルの上のひよこを見た。

初めて会った時、ネイはひよこを食べられず庭に出ていたのだ。

ひとり、回想する。

それは季節が、ようやく暖かくなってきた頃のことだった。

クロマオーはデフォと過ごすことで、平穏を保ってネコハズイ工場での暮らしをしていた。

この工場では、時折パーティーが開かれる。

来る面々は大抵決まっていて、どの人がどれだけ飲み、どれだけ騒ぐのかをクロマオーは知っていた。

今日も工場長が、カルーセルさんの服をビリビリ破いて真実を明らかにしている。

あちらではデフォが、慌てて運んだ赤ワインをよりによってヒトの股にかけて、血尿風になっている。

いつものざわめきの中で、一人の少女に注目した。この集まりで初めて見た、ヒトの子。

工場長がその横に近づいていった。

工場長「オーガスタ、そのひよこを食べなさい。良い味付けだ。」

少女「あとで食べるわ。」

工場長「冷めてしまうよ。カルーセルさんも、ひよこ。」

カルーセル「ひよこ食べる前に、服を着たいですな。」

工場長「デフォ！パンツをご用意しろ！」

カルーセル「とりあえずひよこで隠しています。」

工場長「右手で食べて、左手で隠して、ひよこ二刀流で行きましょう。」

カルーセル「最近じゃあ、ひよこ料理は諸外国の風当たりが強いですな。」

工場長「やれ残酷だ、数が足りないとキイキイ騒いでますね。それなら増えすぎたヒトを食べれば良いんです。」

カルーセル「マゾクでも良いですな。」

工場長「フッフ、これは文化です。大体気持ち悪いんです、良い子ちゃん過ぎて。そのくせ暴力的だ。ひよこの為なら、誰を殺しても良いと思っているふしがあります、奴らは。」

カルーセル「まあ、まあ。」

工場長「そもそも丸ごと食べるのだから無駄にはしませんしね。このまま奴らを野放しにしたら、こっちはおまんまのくいあげだ。」

カルーセルさんは困った様子だ。自分の考えを主張するだけでは、いつまでも終わりが見えない平行線だ。

それにつけても服が着たいだろう。

工場長が自論を再び振りかざした時、少女は頭を下げそこから歩きだした。

すこし青い顔をしているので気になり、クロマオーはあとを追った。

少女は庭に出て、うずくまる。はて、リバーズか？と近づくと、穴を掘り始めた所だった。

こちらにすぐ気付いた。

少女「あなたは？」

クロマオー「僕はクロマオーです。差し支えなければ、お名前をお聞きしてもよろしゅうございますでしょうか？」

少女「……。何でついてきたの？」

クロマオーはちょっと傷つき、顔が青かったからと答えた。

少女「それは大丈夫。ちょっと…ちょっと……本当は見られたくなかった。」

クロマオー「何で穴を掘ろうとしたんですか？」

少女「私が良い子ちゃんだから、かな。」

皿の上には、先ほど工場長がのせたひよこがそのままのっていた。ああ、まるごと煮たそれは、食べるのを躊躇い、こうして弔おうとする少女が世界にいても不思議ではない悲しみがあつた。

クロマオー「手伝います。」

少女「……でも、こんなの偽善だよ。」

クロマオー「良いんです。」

少女「私、食べるもの。他のお肉だって。」

クロマオー「それでも良いんです。このひよこは、あなたにとって友達だから。」

少女「どうして食べてしまうんだらう？」

クロマオー「生きていく為です。」

少女「何かを犠牲にしないと生きていけないのかな？」

クロマオーの掘り続ける左腕に、少女は手をかけた。

もしかして食べてあげる方が良いのかもしれない。

答えなんてなかった。

毎日を生きることしか、クロマオーは知らない。

きっとこの少女だって。



ひよこを埋めた。

意味があるのかは分からない。

うつむいた少女の髪を、クロマオーは汚れた手でそっと押さえた。顔が見えると、少女は名前を告げた。

私はネイ。

不徹底で、不完全な女の子は、クロマオーの心を取りこにした。

ごまかさないで

クロマオーは会場を抜け出した。

食卓にひよこがあるということは、ネイが外に出ているかもしれないと思ったのだ。

繰り返し、繰り返し、同じことばかりしている生活で、

ネイに会ったあの日のことは鮮明にクロマオーを縛り付けた。

ネイは星を見ていた。

“きみは結局、憧れの人になんて手紙を書いたの？”

“シロさんが嫌いなの？”

聞きたいことはそう多くはないのに、背中を見たら、一言に集約される。

「ネイちゃん」

ネイは振り返った。少し落ち込んでいるらしい眉は、頼りない。

ネイ「クロマオー」

クロマオー「ネイちゃん、マジック見ないの？ファンなんでしょう？」

ネイ「ファンじゃないよ。ただ、偉い人には、素直になれるだけで。」

クロマオー「偉くないよ！」

ネイ「ない、ない、ないよ！」

ネイの笑顔が咲く。

ネイ「ファンレターを書いたの。悩みとかも、知らないから言えるから。」

クロマオー「……。」

ネイ「誰かに言いたいけど言えないことってあるでしょう。」

クロマオー「僕に言えば良いじゃない。」

ネイ「クロマオーはクロマオーだから。」

クロマオー「マゾクは相手に出来ないってこと？」

ネイ「そうだね。マゾクだから言えないんだ。」

クロマオーは気道にナイフが刺さってしまったように、一瞬息が出来なかった。

今までネイはいつも種族なんて関係ないって言ってくれたのに。

ネイ「私もクロマオーと本当は変わらないんだから。」

ごまかさないで、ネイは語り始めた。

自分がどうしてここに来たのか。
オーガスタって誰なのかってこと。

私はネイ

ネイはとある村で生まれた。そこに住んでいるものは皆、街の人々から見下されていた。

街の人がしたくない仕事を、村人はさせられている。

女の子として生まれたネイは、母に守られながら、幼少期の殆どを家の中で過ごしていた。

ある日、疲れ果てた母はついに目覚めなかった。ネイはまだ五歳で、どうしたらいいか分からない。

そこに男が一人現れた。たびたび母の元に通った男だった。

彼はネコハズイ工場長。

ネイは抱えられ、母の遺骸を置いて村を出た。

あとからあとから涙が出る。村道は、石ころだらけで馬車が痛む。

工場長はネイに名前を与えた。

オーガスタ

彼はそれが死んだ娘の名前だと言った。同じ年だとも。

ネイはその日からオーガスタと呼ばれた。

時々考えることがある。

『ネイってあだ名かもしれない。』

小さい頃のことで、もう詳細は確かめようがない。

『オーガスタとして生きてきた時間の方が長い。』

好きなことを勉強させてもらい、好きな服を着て、九年が過ぎた。もう十四歳。

それでも母を思う。

呼んでくれた、名前の響きを思い出そうとする。

私は、クロマオーと同じとネイは囁いた。

何も変わらない。

ここから見える、街の明かりから遠く離れた今は暗い、南側の村に私はいた。

私はだれで、

うちはどこなのか、

未だにわからなくなるの……。

ラタームのマジックが決まったらしく、工場から歓声が聞こえる。

クロマオーは、せいいっぱいの気持ちで、ネイを抱き寄せた。

空がおちてくる

「クロマオーってあったかいね。」

.....

「っっあごおおおおおお——！！」



クロマオーの咆哮が響いたが、誰もがマジックの演出の一つと気にしなかった。

恐れ多くも抱きしめていた腕をバタバタと動かすと、と同時につつたクロマオー。
腕を水平に、苦しみから膝を折った。
すると空が落ちてくるような、一斉の雨、雨、雨！
咄嗟にマントにネイを導き入れた。

ネイ「会場に戻ろうよ。クロマオーが濡れちゃう。」

クロマオー「だってマジックやっているだろう。ネイちゃんはあるもの見なくて良い。あんなのはマヤカシだ！」

嘘の気持ち、嘘の愛。

クロマオーは空を見上げた。

可哀想なベルが上で涙をこぼしているなら、
腕の中のこの女の子の涙が隠されているなら、
僕は僕の出来ることをするべきだと思った。

クロマオーは愛すること、

そしてこの気持ちを救うことを願った。

すこし風に当たりたいだけで外に出ていたのに、クロマオーを濡れ鼠にしてしまった。ネイは頑ななクロマオーをどう動かすか一方で頭をひねった。

そこへやってきたのはシロバンチョーだ。
中から二人を見て、入るように言いに来たようだ。

シロバンチョー「おい、どうしたんだ。濡れるだろう？入らないのか？」
クロマオー「マジックなんて僕とネイちゃんは見ない。」
シロバンチョー「せめてこれをかけろよ。」

シロバンチョーは上着を脱ぐと、クロマオーの頭にかけてくれた。

そのまま濡れたまま、シロバンチョーは話を進めようとしたのでクロマオーは怒った。
勢いに押されて、クロマオーのマントに入ったシロバンチョー。

クロマオー「誰かが犠牲になるなんて絶対におかしいんだ。僕はそう思う。」

ものを食べるけど、食べる分は慈しみ育てる。
犠牲になんてするものか。

シロバンチョー「それはムズカシイ問いだ。犠牲にしないと得られないものは沢山あるよ。」
ネイ「まず、マジックを見たくない気持ちを犠牲にして、風邪をひかない体を選びマセンカ？」
シロバンチョー「そうだな.....例えば、ドレイをやめたら、得られるものは沢山あるだろうが、このお嬢さんとはこうも親しく出来ないのかもしれないな。今のお前が犠牲になる。」

考えもしないことだとは言わないが、クロマオーはその言葉が他ならぬヒトから出たことに仰天した。

マントは雨を吸い、ぐっと重たくなっている。クロマオーは肘を折り、固まった肩を労わるように背を軽く後ろにそらした。

その時黒い両手が重なったのと時を同じくして、雲が流れたらしい。
空は急に澄み渡り、シロバンチョーはすぐマントから飛び出した。

クロマオー「僕は、今も十分幸せだよ。」
シロバンチョー「お前知らないのか？マゾクには不思議な力があるんだ。千里先も見渡せるマゾクもいるんだぞ。」

そう、今こうして皆さんにお話してるのはワシ。

あらゆる事情をすべからく見渡せる目を持つ、ワシはフォーだ。

幽閉されて十年。しかし毎日息子を見ている。

一日と忘れたことがない。

シロバンチョーはクロマオーの中にある可能性に、気付いているのだな。

ネイ「すごいんだ、クロマオーって。」

ネイはクロマオーのマントの中に入ったまま、にっこりと笑った。

シロバンチョー「.....またここに来てもいいか？」

クロマオー「シロさんのしたいようにすればいいです。」

シロバンチョー「お前がドレイだからか？じゃあオーガスタ、お前は俺が嫌いなようだけど、来てもいいだろうか？」

ネイは困ったようにしている。クロマオーとシロバンチョーを交互に見ながら。

だからクロマオーは代わりに答えた。

是非来てください。

もっと話したいことがある。

それはたぶん、未来についてだ。

クロマオーと。(3)に続く